

第3回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会

平成30年10月15日（月）
午後2時から4時まで
特別第一会議室（別館9階）

次 第

1 開会

（1）知事挨拶

2 議事

（1）報告

第2回静岡県総合教育会議開催結果

（2）意見交換

社会総がかりで取り組む教育の実現

（3）その他

3 閉会

<配布資料>

資料1 第2回静岡県総合教育会議開催結果

資料2 社会総がかりで取り組む教育の実現に関する論点

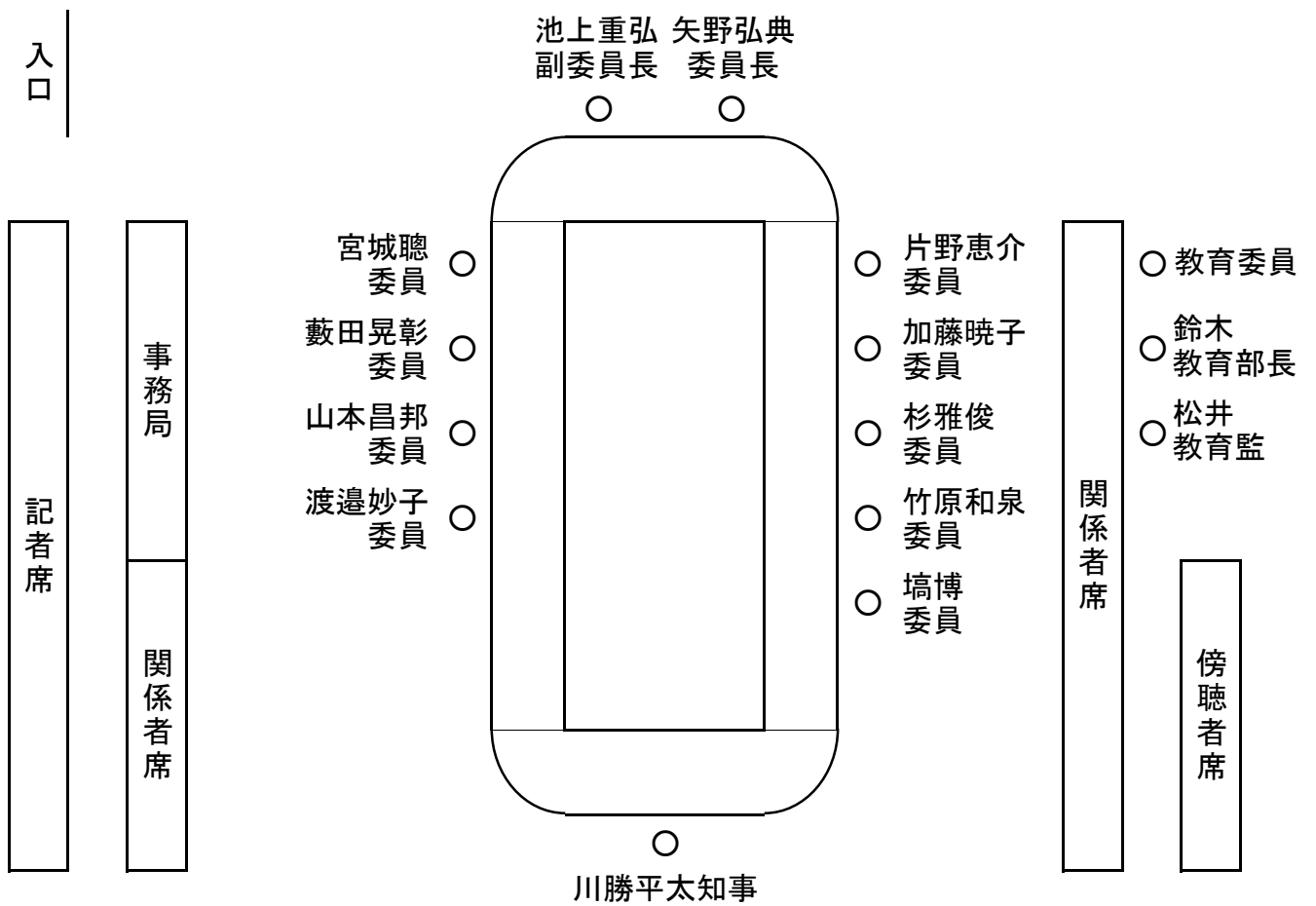
別冊資料 ・ 第3回実践委員会参考資料

- ・ 教員勤務実態調査（概要）
- ・ 未来の学校「夢」プロジェクト平成29年度までの取組のまとめ
- ・ ふじのくに魅力ある学校づくり推進計画
- ・ 静岡県立特別支援学校施設整備基本計画（概要）
- ・ 小学校学習指導要領（道徳）
- ・ 中学校学習指導要領（道徳）
- ・ 第2次静岡県消費者教育推進計画（概要）

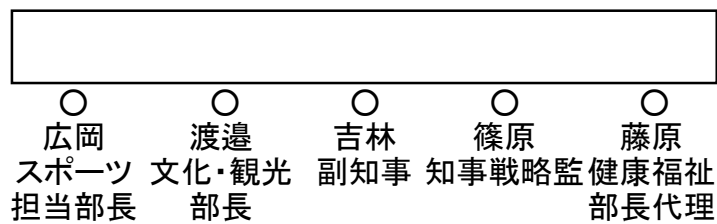
第3回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会 座席表

日時 平成30年10月15日(月)午後2時～

場所 別館9階特別第一会議室



入口



地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会委員一覧

(委員長、以下 50 音順、敬称略)

氏名	役職
やの ひろのり 矢野 弘典 (委員長)	(一社) ふじのくにづくり支援センター理事長
いけがみ しげひろ 池上 重弘	静岡文化芸術大学副学長
かたの けいすけ 片野 恵介	青年農業士
かとう あきこ 加藤 暁子	日本の次世代リーダー養成塾専務理事、事務局長
きよみや かつゆき 清宮 克幸	ラグビートップリーグヤマハ発動機ジュビロ監督
しらい ちあき 白井 千晶	静岡大学人文社会科学部教授
すぎ まさとし 杉 雅俊	静岡産業大学総合研究所参与
たけはら いずみ 竹原 和泉	横浜市立東山田中学校ブロック学校運営協議会会長
とよだ ゆみ 豊田 由美	ちやの ^き 生代表
なかみち いくよ 仲道 郁代	ピアニスト、桐朋学園大学音楽学部教授
ばん ひろし 埴 博	藤枝明誠中学校・高等学校校長
ふじた ひさのり 藤田 尚徳	株式会社なすび専務取締役
マリ クリスティーヌ	異文化コミュニケーター
みやぎ さとし 宮城 聡	(公財) 静岡県舞台芸術センター芸術総監督
やぶた てるあき 藪田 晃彰	日光水産株式会社代表取締役社長
やまもと まさくに 山本 昌邦	(一財) 静岡県サッカー協会副会長
わたなべ さやか 渡部 清花	東京大学大学院総合文化研究科修士課程
わたなべ たえこ 渡邊 妙子	(公財) 佐野美術館館長

平成30年度 第2回静岡県総合教育会議 開催結果

- 1 開催日時 平成30年9月5日（水）午前10時～正午
- 2 開催場所 静岡県庁別館8階第1会議室A、B、C、D
- 3 出席者

静岡県知事	川勝 平太
教育長	木苗 直秀
教育委員	渡邊 靖乃
	藤井 明
	加藤 百合子
地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会	
委員長	矢野 弘典

- 4 議事 「技芸を磨く実学」の奨励（スポーツ・文化芸術）
- 5 出席者発言要旨（抜粋）

出席者から以下のような提案が出された。

<論点1：子供たちのスポーツ・文化芸術活動の促進>

- ・子供たちが多種多様なスポーツや文化芸術に接することで、自ら気づき感じる機会を提供するために、毎年度一つずつ普及活動の対象となるものを選び、授業で教えていく仕組みが全県、地域、学校単位であってもよい。
- ・スポーツや文化芸術に興味を持った子供たちが、部活動ではなく学校の外で活動できる体制づくりを進めていかなければ、普及活動の効果が薄れてしまうのではないか。
- ・これまでの教育のあり方を根本から見直し、最新のIT技術を導入することで学校現場の負担を軽減し、教員が教科指導以外で時間的、精神的余裕を持って指導できる仕組みづくりが必要ではないか。
- ・東部地域ではブリヂストンの自転車競技の選手が地域の人と交流するなど、県内ではラグビー以外にも様々な競技が盛んに行われており、それぞれの地域の特色を活かした活動があるとよい。
- ・新たな価値を生み出していかなければならない時代になると、創造力を培うような教育が大切である。
- ・美を楽しむ手本となる大人がいないので、大人を含めた芸術を楽しむ機会をつくらなければならない。

（ラグビーの授業について）

- ・日常の学校教育の中でどこまで普及活動していくのかを、全県で目標を共有して実施し、子供たちがどのような反応をするのか把握できる体制をつくり、行政の立場から活動支援策の継続性を検討するべきである。

- ・国際イベントの機会を活用しようとするのは分かるが、ラグビーの授業を実施することで現場の先生の負担が増えるのではないか。
- ・ラグビーを教えることに対して、子供たちにプッシュし過ぎず、興味関心の入り口を提供する程度であれば学校の役割であるが、教えるのは外部の人たちの役割である。
- ・座学でラグビーを教えるのもよいが、まず始めに選手に会う機会をつくったり、地域での練習試合に招待したりして、子供たちが興味関心を抱き、探究心に結びつくようなアプローチをしたらどうか。
- ・専門的な知識がない教員でも、電子黒板や映像を多用して教えられる使い勝手のよいデジタル教材を作るのがよい。
- ・授業の実施については、対象を小学5年生、また、中学1，2年生を中心とし、各学校の主体性を重んじ選択制として、学校現場に無理のない形で進めていってはどうか。

<論点2：異文化交流の促進>

- ・交流する相手と同じ目的やビジョンを共有して、異文化交流できる仕組みを構築できるとよい。
- ・教員が異文化に対する抵抗感を無くし、子供たちに「相手を考える」、「伝え合う」ことを身に付ける教育を目指すべき。また、コミュニケーション能力の習得では、教科書を使って座学で教える形式を見直す必要がある。
- ・異なる文化や環境を日常的に身近なところに存在させ、子供たちになるべく多くの異文化に接する機会をつくる工夫が大切である。また、教える側も、地域の外国人や企業の人材を教壇に立てるようにするなど、多種多様であってもよい。
- ・日本の文化を知りたい外国人もたくさんいるので、子供たちが外国人に日本の文化を伝えられる場や、日本語で交流できる場を設定するのもよいのではないか。
- ・文化や宗教などの違いはあるが、一緒に暮らすことで相互理解が深まる。ホストファミリーとして外国人をホームステイで受け入れることは非常に効果がある。国際イベントを契機に、学校だけではなく、地域ぐるみで迎える気持ちで臨み、交流を深めていくべきである。
- ・人工知能の導入など先進的な教育や、異文化交流を活発に行える公立の全寮制インターナショナルスクールをつくってはどうか。

6 知事総括

- ・今日の議論で出た事柄については、できるところから進めていく。ニーズに合わせ、できる限り新しい一歩を踏み出していくことが大切である。

「技芸を磨く実学」の奨励（スポーツ・文化芸術）に関する論点

静岡県の未来を担う「有徳の人」の育成を進めるに当たっては、「知性を高める学習」（英数国理社等）だけでなく、小さな頃から「技芸を磨く実学」（農林水産業、工業、商業、芸術、スポーツ等）に触れる機会を与え、子供たちの興味や関心を引き出し、一人一人の能力や適性、意欲に応じた多様で柔軟な教育をより一層展開する必要がある。

特に、ラグビーワールドカップ2019、東京2020オリンピック・パラリンピック及び同文化プログラムの開催を目前に控え、県民のスポーツや文化芸術に対する関心が高まる中、子供たちの興味を深め、能力を更に伸ばす仕組みづくりが重要である。

論点1：子供たちのスポーツ・文化芸術活動の促進

国際イベントの開催を一過性のものとすることなく、これを契機として、子供たちのスポーツ・文化芸術活動を促進するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

論点2：異文化交流の促進

国際イベントは、単にそのイベントを観る、あるいは参加するだけでなく、世界の文化に触れる絶好の機会である。この機会に、子供たちの異文化交流を促進するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

実践委員会の意見の総括

<論点1：子供たちのスポーツ・文化芸術活動の促進>

- ・ラグビーワールドカップ2019の開催に合わせ、提案をしたい。①小中学生を対象に、各国のラグビーの歴史などを織り交ぜた静岡県独自の教科書をつくり、座学で来年4～7月までに各月1回程度授業の実施ができるか。②チケットを用意して、子供たちがエコパでの試合を観戦できるようにしたい。③女子ラグビーチームの立ち上げを考えている。
- ・提案された授業は「総合的な学習の時間」の活用が考えられ、座学であれば運動の苦手な子供たちも興味を持てる。教科書がラグビーの予備知識や各国の食文化の紹介、健康的な体の作り方など、幅広い人間教育の観点から総合的な教材となればワールドカップを楽しむ広がりが出てくるのではないか。
- ・ラグビーに限らず、演劇、サッカー、卓球、農業でも同様に展開できる。教師の研修を含めた静岡モデルを構築するとよい。
- ・多様な体型の人がチームにいて成り立っているラグビーをとおして、組織運営や集団生活で活用できる考え方や、ラグビーの持つ思想を教育現場で広めていくとよい。
- ・文化・芸術・スポーツなどに限らず、将来の進む道を10代で決めていく子供たちへの親の後押しや、その才能を見抜ける指導者の育成に加え、子供たちがたくさん体験できる仕組み、環境を整える必要がある。
- ・サッカーをはじめ、女子のスポーツチームに関しては、地域のトップ人材を活かし、継続して活動できる環境を整えていく必要がある。指導者や子供が不足している現状では、地域単位の部活動で実施しないと無理である。

<論点2：異文化交流の促進>

- ・国際イベントの開催により、世界各国から外国人が来日するので、各国の食文化と関連させるなどして、子供たちに異文化について興味を持たせるとよく、それが日本の文化を昇華・発展させていくことに繋がる。
- ・来日した外国人と子供たちとの交流の場として、パブリックスペースであるお寺を宿泊場所として活用できないか。

「技芸を磨く実学」の奨励に関する実践委員会の意見

論点1：子供たちのスポーツ・文化芸術活動の促進

ラグビーワールドカップ2019に関連した取組の提案（清宮委員）

①〔座学授業〕

- 本県開催の盛り上がり、開催後のレガシーに繋げるため、小中学生を対象に、座学でラグビーの授業を実施できないか。

（教材づくり）

- ラグビーワールドカップの概要に加え、ラグビーの歴史や成り立ち、各国でラグビーがどのように扱われてきたのか、などを織り交ぜた教科書をつくりたい。対象となる県内全ての子供たちに教科書を配ることで、ラグビーに関心を持っていない層へ働きかけていくことが大切である。静岡県独自の教材をつくることで、他の開催県に波及させたい。

（授業展開）

- 普段子供たちと接している担任の先生がラグビーの授業を行う。その際、教師が教える内容を教科書からそれぞれ選び、4～7月くらいで各月1回程度実施してもらいたい。座学授業により興味を高めた後にヤマハララグビー部員が小学校に行き、子供たちと触れ合いながら大会本番を迎える。

②〔ワールドカップ観戦〕

- できたら観戦チケットを用意して、子供たちが観戦できるところまで持っていければベストである。

③〔女子ラグビーチームの立ち上げ〕

- 本県のワールドカップレガシーとして女子ラグビーチームを立ち上げることを考えている。女子中高生が、これまで経験したスポーツから競技転向する際に、ラグビーはベストスポーツである。

上記提案に対する各委員からの意見

- ルールを教えたり、実際に体を動かしたりするだけでなく、栄養に関する知識や健康的な体の作り方など、幅広い人間教育の観点からどんな人でも楽しめるような総合的な教材ができれば面白い。（白井委員）
- 単なる体験活動ではなく、農業で言えばミツバチが重要な役割を果たしているなど、子供たちにとって身近な話題で伝えていくアプローチは興味を持って聞いてもらえるのでよい。（豊田委員）

- 小学校においては、ラグビーという明確なテーマを設定できるので、「総合的な学習の時間」であれば実施できる可能性が高くなるのではないかと。（豊田委員）
- 座学でラグビーを教える発想が良い。クラスには運動が苦手な子供が半数近くいるので、そうした子供にもラグビーの歴史や楽しく観るための予備知識を教えることでワールドカップを楽しむ広がりが出てくる。（宮城委員）
- 副読本をつくり、モデルを示して教師の研修を体系的に行う必要がある。研修も含めた静岡モデルを構築するとよい。（池上副委員長）
- 教科書の中でそれぞれの国を紹介する際に、その国におけるラグビーの発展と植民地支配との関係性を子供たちが頭に描きやすくつくって欲しい。また、多様な体型の人がチームにいることで成り立っているスポーツであることから、ラグビーを組織運営のアナロジーとして学べるようにするとよい。（池上副委員長）
- ラグビーに限らず、演劇、サッカー、卓球、農業でも展開できる。今回はタイミングとしてラグビーから始めていくのはよい。（豊田委員）
- 企業経営とラグビーは似ている。新しい仕事を後ろにパスして前に進み陣地を取る。授業をとおしてラグビーから学べること、背景や共通点を同時に教えてあげられるよい機会となる。（藤田委員）
- 経営者として組織をまとめ、部下を指導するという点では、ラグビーの持つ思想は非常に素晴らしい。「One For All, All For One」を小中学生の教育現場で広めていくとよい。（矢野委員長）

指導者養成や環境整備に関する意見

- 教育に対して熱心で、スポーツの本質を知った上で、競技指導をとおして人間教育ができる指導者が少ない。今回作成する教科書を使って指導できる人材を育てることが大切である。（渡邊委員）
- 将来の進む道を10代で決めていく子供たちへの親の後押しや、その才能を見抜ける指導者の存在は必要不可欠である。そうした環境整備について、行政や教育現場の取組は必要である。（豊田委員）
- 文化・芸術・スポーツなどに限らず、他の模範となる静岡モデルを構築して子供たちがたくさん体験できる仕組み、環境を整える必要がある。スポーツをとおして、子供たちが達成感や失望感などを経験し、自らの心を成長させることが大切である。（山本委員）

- 教える側が専門家でなくても、子供たちに関心が持てる場を与えれば、子供は反応して成長していく。足りない部分は学校で個別にサポートしていけばよい。(埴委員)

女子の部活動(地域部活)に関する意見

- 女子チームに関して、例えばサッカーでは小学校までは女子は男子とともに活動するため登録者数が多いが、中学校では部活がないため登録者数が激減する。地域のトップ人材を活かし、継続して女子が活動できる環境を整えていく必要がある。(山本委員)
- 地域部活について、女子サッカーでも始めたい。指導者や子供が不足している現状では、地域単位の部活動で実施しないと無理である。(山本委員)

その他の意見等

- サッカー部をはじめ運動部では、挨拶や立ち振る舞いなどがきちんとでき、問題行動が激減した。また、一年をとおして地域清掃や子供たちにスポーツを教えるなどのボランティア活動を行っており、学校の中だけでなく地域に拡大している。(埴委員)
- スポーツ・文化芸術活動のアンケート結果について、それぞれ男女別で詳しくデータを出すことで、その種目や分野での適切な対応や環境の整え方が変わってくるのではないか。(マリ委員)

論点 2 : 異文化交流の促進

国際イベント等を契機とした異文化交流に関する意見

- ワールドカップでは、選手のみならず世界各国から多くの外国人が来日するので、各国の食文化と関連させて子供たちに異文化について興味を持たせるとよい。(豊田委員)
- 静岡県と交流の深いモンゴルをはじめとする国々の異文化を知るためには、食文化やスポーツ等からのアプローチによる調べ学習をもっと充実させるべきである。国際イベントを契機に異文化に触れることが、日本の文化を昇華・発展させていくツールになる。(片野委員)
- 国際イベントで来日した外国人がお寺に宿泊できないか。外国人にとってはプレミアムな体験になるに違いない。ホテルでの宿泊とは違い、パブリックスペースであるお寺は、地域の子供たちとの交流の場として活用できるのではないか。(池上副委員長)

ラグビー教本の制作及び学校教育への活用について

文化・観光部ラグビーワールドカップ 2019推進課
教育委員会義務教育課、健康体育課

1 概要

ラグビーワールドカップ2019を契機として、ラグビーに関する教本を制作し学校教育に活用することで、子ども達のラグビーへの関心を高めるとともに、ラグビーの崇高な精神や人としての生きる道を子ども達が学び、人間としての成長につなげる。

2 教本の概要

項目	内容(想定)	備考
配布対象	<ul style="list-style-type: none"> ・県内の小学5年生 ・県内の中学1年生 	*個人でなく学校に配布し、次年度以降の活用を可能とする。
教本の内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ラグビーの歴史 ・ラグビーから学べる精神 (「One For All, All For One」などのラグビー精神、ラグビー憲章に定める5つの価値「品位、情熱、結束、規律、尊重」など) ・基本的なルール、出場国の歴史、文化等 ・出場国の選手紹介、過去の名選手の人生(生き方)など 	60～80項目(頁)程度を想定
指導マニュアル、映像教材等	・指導マニュアルやDVDなどの映像教材を教本と併せて作成	*教員の負担軽減、生徒の親しみやすさの観点から作成
予算	16,700千円(9月補正予算)	
教本の活用例	<ul style="list-style-type: none"> ・総合的な学習の時間 ・保健体育(*中学校) ・参観日等(*保護者も一緒に聴講可) ・学校行事 ・朝・昼・放課後の時間(*裁量の時間枠) 	*各学校の実情に合わせて実施
授業等の実施方法	<ul style="list-style-type: none"> ・応募方式で「重点校」を選定 ・重点校は、H31.5～7,9月の間で月1回程度授業等を実施する。 ・「重点校」には、最低1回、ヤマハ発動機ジュビロの現役選手が「ラグビーワールドカップ大使(仮称)」として学校を訪問する。 ・重点校以外の学校は、各学校の実情により実施方法を決定する。 	
スケジュール	H30.10～H31.2月 教本の作成 H31.4～5月 小中学校に教本を配布 H31.5～7,9月 授業等の実施	

社会総がかりで取り組む教育の実現に関する論点

子供たちの教育は、学校の先生だけに任せるのではなく、「地域の子供は地域の大人が育てる」という決意の下、取り組むことが重要である。

特に学校においては、社会の変化に柔軟に対応し、地域住民や保護者からの理解と参画を得ながら、子供たちの学びを支える地域に根ざした学校づくりを推進することが必要である。

また、自らの能力を最大限に伸ばす機会は、等しく与えられるべきであり、個々のニーズに応じた教育の充実等、夢や希望を持って社会の担い手となる教育を推進することが必要である。

これらの取組により、「才徳兼備」の人材を育む教育を社会総がかりで推進していく必要がある。

論点1：学びを支える地域に根ざした学校づくりの推進

多様化する児童生徒の実態や社会の実情・ニーズに柔軟に対応した地域に根ざした魅力ある学校づくりを進めるために、具体的にどのような取組が考えられるか。

【検討の視点】

- ・ 地域学校協働本部やコミュニティスクール等、地域と学校の連携・協働の推進
- ・ 教職員と子供が向き合う時間の拡充
- ・ 地域の実情等を踏まえた魅力ある高等学校の実現

論点2：誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進

全ての人々が生まれ育った環境や経済的理由に左右されず、自らが持つ能力・可能性を最大限に伸ばし、夢や希望を持って社会の担い手となれる教育を推進するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

【検討の視点】

- ・ 障害のある人、外国人等を始めとするマイノリティとの共生意識の醸成及びいじめ、貧困等に対する相談支援体制の構築
- ・ 特別支援教育の充実（障害のある児童・生徒一人一人のニーズに対応した指導と切れ目ない支援体制の構築）
- ・ 道徳教育を始めとする豊かな情操を育む教育の推進
- ・ 社会参画に向けた教育・支援の充実（消費者教育など）